

Mwe シニア会会報

Mwe Senior Club

NEWSLETTER

No. 5, 2001 年 3 月

目 次

第 7 回講演会・懇親会開催

講演「やわらちゃんを生んだ日本柔道」 p. 3

講演会講師 [上倉明生氏] とともに p. 12

懇親会「利き酒会」 p. 13

囲碁同好会設立会開催される p. 14

Break Through 誌寄稿(2000. 11) p. 16

Break Through 誌寄稿(2000. 9) p. 18

行事の案内と今後の活動計画 p. 20

会員の加入状況、賛助会員と会員名簿 p. 20

役員一覧 p. 2

Mwe シニア会

Mwe シニア会

平成12年度役員一覧（敬称略）

会員総会・総会議長	米山 務
会長	水品 静夫
副会長	北爪 進
監事	小林 禧夫

運営委員会

会長	水品 静夫
副会長	北爪 進
会計幹事	松本 巖
幹事	赤田 邦雄
	伊東 正展

企画担当

新井 陽一
石田 修巳
奥野 清則
小淵 知己
佐藤 軍吉
柴富 昭洋
西川 敏夫
平井 克巳

発行者	Mwe シニア会
発行責任者	水品 静夫
事務局	〒215-0034
	川崎市麻生区南黒川 10-5
	アイ電子株式会社 伊東 正展
TEL :	044-981-3866, FAX : 044-981-3868
E-mail:	itoh-ai@mb.asmnet.ne.jp
発行日	2001年3月21日

第7回Mweシニア会 [講演]

やわらちゃんを生んだ日本柔道

上倉 明生

ご紹介いただいた上倉でございます。皆様、マイクロエーブ世界では、一流の方がお集まりの席上で何かお話するなど大変おこがましいことと思っております。実は大学柔道部のOB会のことなのですが、毎年新年会に100名ほどが集まります。その席上、各界で活躍しておられる大学同窓生の方1名の冒頭講演をお願いすることになっておりますが、今年から私が会長になってしまいましたので、来年2001年新年会の講師には、話題の宇宙開発分野に活躍の北爪さんを引っ張り出そうと思っておりました。10月にゴルフと一緒にすることになっておりましたので、そのとき頼もうと考えておりました。その矢先、なんと逆に講演をやれと機先を制するようなメールが北爪さんから入ってきて「エ、エッ」と驚きました。反対に頼まなくてはならないことを腹に持っている私としては、嫌と言えなくなりました。まあ、柔道の話ならば50年も続けてきた道、いくらかはお話できるかと、OB会での講演とバーターでお引き受けする羽目となりました。どうぞご容赦いただきたいと思えます。

というわけで、私の柔道ですが小学校1年のころ家によく遊びにきた父の勤務先の青年から手ほどきを受け、その後15歳ぐらいから警察の道場に通うようになりました。現役としての最終段位は29歳のとき4段を取り、その後指導者として5段を受けましたが、囲碁などの段と同じでお金がかかりますのでもうそれ以上をいただく気はありません。そのお金で何回もゴルフのラウンドに行けますので。

そう言えば、お集まりの皆さんも大勢の方がゴルフ好きと北爪さんに聞きました。柔道はご経験

ない方が多いと思いますので、場合によってはゴルフを喩えに出して柔道の身体捌きなどをお話してみても思っています。私も今ではゴルフ、ゴルフで、住まいゴルフ場の近くに越して

しまったので、北爪さんにはあきれられております。でも、ゴルフをもっと早く若いうちにやっておれば、柔道ももっと鍛錬のやり方があったなー、といつも実感しております。ゴルフをやって初めて、スポーツがこんなにも微妙なものであったことを知りました。そのことについては後で申し上げるとして、まずは手始めに柔道の段位とゴルフのハンデキャップを比較してみましようか。そうですね、柔道初段の人は、やっとならぶペースでコースを回れるようになったというところでしょうか。ということはハンデキャップ18ぐらい。もちろん同じ段位でも強い弱い幅がありますから平均的に言ってということですよ。2段でシングルプレーヤー入り。3段ではハンデキャップ0から2ぐらいのローハンデ者。4段以上はもうプラスハンデということになるろうかと思えます。現役選手としての柔道が最も強い時期はだいたい4段か5段までです。3段でもトップレベルの大会に出る選手がいます。同じ段位と言いましても、囲碁の段位とは少し違うようです。昔私と北爪さんは大学の学生寮も一緒だったのですが、その学生寮に、囲碁の好きな方ならご存知と思えますが、



アマチュア4強と呼ばれ日本のトップに何度も立った原田実さんという方がいまして、さきほどの私どもOB会で原田さんに講演してもらいましたが、その原田さんの話から推察すれば、囲碁の場合プロが居ますからアマチュア段位で言いますと、初段は柔道と同じでハンデキャップ18ぐらいですが、講談社の段位は少し甘く6・7段がハンデ0位に相当するようです。

さて話を柔道に戻しますと、皆さんもそうだったと思いますが、シドニーオリンピックのときは私もテレビにかじりついてスポーツの観戦を存分に楽しみました。こんなにも毎日テレビの前に座ったのはそれこそ生まれて初めてです。これも昨年8月で仕事を終え毎日が自由な身になったからのことなのですが。

さて、そのオリンピックの序盤に組まれていた日本期待の柔道ですが、第一日目から男女最軽量級で野村選手と柔らちゃん田村亮子選手がアベック優勝し、大変嬉しいスタートになりました。皆さんも、この調子だと日本が金メダルを独占するんじゃないかと思われたのではないのでしょうか。ところが二日目以降は思い通りの結果になりませんでした。女子では田村を含め4人もいた前年度世界チャンピオンの内、楢崎教子、前田桂子、阿武教子の3人もが、そして男子ではやはり世界チャンピオンのあの吉田秀彦も敗れてしまいました。終盤本命視されていなかった滝本誠選手が一本技を連発して金メダルを取り、さらに100キログラム級世界チャンピオン井上康生選手が見事にオール1本勝ちで優勝し溜飲を下げたのもつかの間、金メダル間違いなしといわれていた最重量級の世界チャンピオン篠原信一選手が例の問題判定で敗れるという、日本にとって大変にがい結末で締めくくられることになりました。

ご存知のように柔道は日本生まれのスポーツです。というより、もともとのその家元が日本にあった格闘技の一種です。その家元とはご存知の

講道館です。かつては柔道といえば講道館、と何の抵抗も無く受け止められていました。講道館の柔道が世界に広まって、柔道が国際化してくるなかでさまざまな問題が起きて今や柔道イコール講道館柔道と言えなくなったところが、日本の柔道界のジレンマであり、あの判定のような問題が起こってくる根本の原因と私は思っております。お家芸であるはずの日本選手が国際試合においてそれと勝てなくなってきたことは、勿論外国選手のレベルが上がってきたためですが、講道館柔道と国際柔道の質が変わってきたことにも大きく影響されています。日本選手は日頃その中で訓練している講道館柔道と、国際試合での柔道の違いに悩むようになっております。日本では、柔道試合の審判規定が国内試合『講道館柔道試合審判規定』と国際試合『国際柔道連盟試合審判規定』とで二本立てになっております。これは他の国には無いことです。日本選手はどちらを重視した訓練をしたら良いのでしょうか。では、講道館柔道と国際柔道の根本的な違いはどんなところにあるのか。実は単なる技の相違といった問題ではなく、柔道とは何であるかという基本的な部分に相違があるのです。そのことをお話してみましよう。

講道館柔道は、その名前をお聞きになった方が多いと思いますが、嘉納治五郎という人によって創設されたものです。その時期は明治15年5月とされております。この嘉納治五郎という方は決して柔道を職業とした人では有りません。明治維新後の日本の国造りに教育面で大きな業績を残した人です。



東京大学の第2期生としての学生時代明治15年(23歳)から学習院創設期の講師を受け持ったのを手始めに18年(26歳)にはその教頭になり、24年文部省の参事官を経て熊本にある第5中学校長、26年(34歳)には文部省図書課長・第1高等学校長・高等師範(後の教育大学)学校長の3職を兼務、と既にこの若い時期から大変エネルギッシュな発展です。こうした中、日本教育の学制改革にも関わったりしております。後に貴族院議員に押され、政治面からも教育改革に取り組んでおります。また日本体育協会を作りその初代会長、晩年は日本初のオリンピック委員になり東京への第15回オリンピック(昭和15年)誘致に成功しております。そしてこのオリンピック委員会の帰途、氷川丸の船上で急逝されました。79歳でした。ただしご存知のとおり大戦のためこのオリンピックは中止となりました。このような人が起こしたのが講道館柔道であり、このような人が興こしたものであればこそその特徴が講道館柔道に有るわけです。

嘉納さんが書き残されたものはたくさんありますのでそれらを纏めたものなどをこの度改めて読んでみたのですが、嘉納さんは灘の酒造りの名家に生まれ大変恵まれた生活環境に育ち、またそれにも増して立派な両親に恵まれ、素晴らしい育て方をされたようで、世のために役のたつ生き方をするのが人間の一生だという考えを自然に持つに至っていたようです。11歳のとき勉学のため東京に出てきて塾や学校へ通うことになり、その素質と熱心な姿勢によりどこにおいても師から将来を嘱望されるようになったようですが、本人にはたった一つですが、大きな悩みがありました。体が小さく、また丈夫でも無く、維新直後の荒い気質の同僚たちから腕力でいじめられることでした。いじめは今も昔も変わらないようです。これが後に柔道を興す動機へとつながっていったわけです。そのことをこのように回顧しています。

『学問上ではたいの者に負けないとの自信が有りながら、往々にして人の風下に立たせられた自分は、幼少の時から、日本に柔術というものがあり、それはたとえ非力な者でも大力に勝てる方法であると聞いていたので、是非この柔術を学ぼうと考えた』

けれども当時の日本は文明開化の風潮が謳歌している時代でありますから、剣術とか柔術とかの武術は江戸時代から一変して軽蔑されるようになっておりました。従って父親に相談しても、「今時何を言っているのか」と一蹴され許しを得られません。また周囲の大人に柔術を教えてくれる人の紹介を頼んでも相手にされません。自分で探そうにも、かつて道場を構えていた剣術家や柔術家は既にその道では生活できなくなり次々に廃業してしまっていますから、なかなか見つかりません。柔術家だったと知られると「古い人間だ」と馬鹿にされる風潮にそれを隠す人も多かったようです。結局東京大学に入学する18歳の年までその希望はかなえられなかったわけです。大学に入り、友人から「整骨をする人が昔の名残の柔術家」ということをふと耳にし、整骨医の看板を見ればそこへ飛び込むという風にして再び真剣に柔術の道場を探し始めるわけです。そしてついに見つけ入門したのが天神真楊流という流派の老先生でした。父を口説き落として入門、懸命に稽古に励みます。2年で老先生が死に続いて同じ流派の別の道場へ入門、この頃は既に師範代を任されるようになっておりました。この先生も2年で亡くなりました。今では嘉納さんも、細々ながら続いている柔術界の情報にも明るくなっていたのでしょ、今度は起倒流という別の流派へ入門するわけです。昼間は東大生としての猛勉強、夜は柔術の猛稽古ともうもう大変な頑張りだったようで、稽古の帰り道まともに歩けなくなって真夜中の道端にしゃがみ込んでいたところを警邏の巡査に誰何されたというような逸話も書かれています。

この努力も偉いのですが、実は、これで柔術が強くなったというだけで終わらなかったところが、嘉納治五郎さんの本当の偉さだと思います。嘉納さんはこうして諸派の柔術を学ぶ中から、「小が大を制す」ための根本原理を掴み、それを理論化して柔術の技を合理的に再編していくという努力をしたのです。その上嘉納さんは、その柔術に新しい意義を見つけ出します。それは、人間の身体を成長させ健康を増進させ精神を修養する上で柔術は理想的なものだ。各部の筋肉を鍛えることはもとより、俊敏性もバランス良く増進することが出来る。さらに精神状態も改善され自制的精神を培うことが出来る。こういうことに大きな意義を見出し、従来の柔術を脱皮して相当の工夫を加えれば、知育・体育・徳育としてまことに貴重なものになるに違いない。このように考えたわけです。しかもそれを単なる考えで終わらせず、柔術をこうした理想に向け根本的に編成しなおし、「柔道」と呼ぶこととしました。「柔道」の呼び名については、嘉納さんはこう言っています。

『本来柔術という名称そのものから止めたかったのだが、先師からこの名によって教えられた技術がもととなって今日をなしたのであるから、名までも全然変更するのも本意ではないと考え、柔の一字をのこし、柔道としたのである』

前にお話したように、嘉納さんはまだ東大学生の時から学習院で政治学と財理学の教諭をしていましたが、一方でいろいろな人から学生の手話を頼まれ書生として同居させていたといえます。人数が増えてきたので明治15年2月永昌寺という寺の書院と付属屋を借り、そこに住むことにしました。書院の一間に畳を敷いて書生たちや学習院の学生の中から一人二人と柔道を教え始めたのが講道館の始まりです。このあたりからは皆さんご存知の小説「姿三四郎」のモデルとして扱われる出来事が多く出てきます。「学士様が柔道なんて勝手な新派を興しやがって」とのやっかみも

有り、講道館は世に残る柔術諸派からの挑戦を受けます。これが「姿三四郎」の題材になっております。主人公姿三四郎には西郷四郎というモデルがいます。その他四天王として描かれている柔道家たちのモデルもいます。富田常次郎、山下義昭、西郷四郎、横山作次郎の4人が実在した講道館の四天王です。これらの人を中心に群がる諸派の挑戦試合をすべて退けて講道館が生き残り、武術衰退の風潮の中から蘇ったと言えます。余談ですが「姿三四郎」を書いた富田常雄は四天王筆頭の富田常次郎のお孫さんです。

武術軽蔑の時勢の中からは蘇ったかと言いますと、柔道が単なる武術から脱却して新しい時代の教育に適合したということ、そして武術としても合理的な技の研究と訓練で、門下生たちが抜群に強くなっていったということです。では講道館柔道の強さのもととなったその技の合理性とはどこにあるかを私の経験も含め申し上げますと、まず「自然体の構え」です。肩幅に足を開いて肩の力を抜き関節にゆとりを持たせてすっと立つ。前へかがむことも後ろへ反ることもしない、いわば普通に立った姿勢です。相手と組み合うときも出来るだけ腕の力を抜いて軽く握る。柔道の構えの理想です。なぜ理想的かという、いろいろな技に入るときすばやく変化できる。また相手が掛けてきたときにすばやく対応して防ぐことが出来るからなのです。私も高校時代から大学時代にかけて、この構えについては、膝を深く曲げて重心を落としてみたり相撲のようにがっちり組んで足を開いてみたり、色々試みてみました。そして結局、自然体が最も良いことを悟りそこへ戻りました。ゴルフに喩えますと重心を身体を中心に置き、肩の力を抜いてすっと構えたアドレスということになると思います。このようなアドレスであれば、スイング中ぐらつかずフォロースルーもしっかり取れることになりましょう。類似していると思われませんか。技の合理性もうひとつの基本は、相手を投げようとする際の「崩し」で

す。これは何のことかと言いますと、ここにあるグラスを例に説明しますが、こう言う風に普通に置かれているグラスはそう簡単には転びません。ところがこのように少し傾けてやりますと、ちょっと払うだけでグラスは倒れてしまいます。この「ちょっと傾けてやる」ことが崩しなのです。技をかける前提として必ず崩してからかけるというのが講道館柔道の大切なポイントです。かといって普通に立っている相手を傾けることにはこれまた力があるわけで、そう簡単には崩れません。どうするかというと相手の動きを利用して崩せということです。相手の動きの一つ先回りをして崩すのです。講道館柔道には「押さば引け、引かば押せ」という教えがあります。これもこの崩しの極意です。それまでの柔術は相手が押してくれば、負けまいとして押し返す、相手がこちらを引き回そうとすれば引かれまいとして引き返す、それが常識でした。嘉納さんが柔術修行のある日、それまでどうしても勝てなかった起倒流の先生を自分でも不思議なほど何度も投げる事ができた、それまで研究していた崩してから投げるという動作をその日徹頭徹尾試みた結果であった、先生が不思議がって尋ねるので、その崩しの研究について話したところ、先生は「もう私が教えるところはない」と言って起倒流の免許状を嘉納さんに与えたということです。相手が押してくれば押し返すのではなく、相手の押しより少し速い速度で後退する。相手は力をすかさされた形になって前に崩れるのです。そこに足を出すなり腰を入れるなりすれば大きな相手でも軽く投げる事が出来ます。

さて、ここまでお話したところで国際柔道との比較に戻ることといたします。実は日本の柔道はその後変化しながらも伝統的にこの嘉納先生の教えを根底に置いてきているわけです。ところが講道館が広めたはずの国際柔道は家元から独り立ちし、文化の違いも有って講道館柔道と異なる方向に歩き出しました。国際柔道連盟が結成され

たのが 1953 年です。それから 10 年あまり連盟はすべて講道館の主導で運営されました。試合の方法やルールもすべて講道館のものが適用されたのです。しかし外国選手が力をつけるに従い講道館の主導に不満が出始め、1965 年国際柔道連盟独自のルールを制定することが決議されました。ヘーシンの出現によって第 3 回世界選手権（1961 年）東京オリンピック（1964 年）第 4 回世界選手権（1965 年）と立て続けに王座が日本から奪い取られたことも、国際柔道連盟での発言力バランスに大きく影響したと思います。まあ遅かれ早かれの問題ではあったと思いますけれど。余談ですが東京オリンピックでは私も学生時代対戦したことのある猪熊功選手やこれまた同年の神永昭夫選手が出場することもあり、入場券を求めて応援に行きました。重量級の猪熊選手は優勝したのですが、無差別級で神永選手がヘーシンクに敗れついに日本人が外国人にかなわないときが来たかと淋しく思ったものです。翌日、勤務先の社長から「お前昨日会社さぼってオリンピックに行っていたらどう。隠してもテレビに映ったぞ」と冷やかされ、「じゃ社長も仕事中にテレビを見ていたんですね」と言い返した思い出がありますので、良く覚えています。

柔道は国際化によって大きく変わり始めました。東京オリンピックで重量別の試合方式が取り入れられたことがまず大きな変化でした。それまで「柔能く剛を制す」を旨とする柔道は、西洋のレスリングやボクシングと異なり、重量別の試合など眼中にありませんでした。「小さいものでも大きいものを倒し、押さえ、関節を取り、締めて勝ち取る」ところに柔道の真髓がある」といわれ、またこのことが、前にお話したように嘉納さんが柔術に取り組んだきっかけでもあったのですから。私も重量別の柔道試合を経験したことがありません。私の体重は 70 キロでしたから、大学の大会に出て行きますと当時でも小柄のほうでほとんどの対戦相手は自分より大きな人間でした。先

ほど申した猪熊選手と対戦してみてもさほど大きく感じなかったのですが、それでもオリンピックには重量級で出場しましたから 100 キロを超える選手だったと思います。140 キロの相撲取りのような選手と対戦し、投げるには投げたのですが、あまり丸すぎて勢い良くバタンとはいかず、ゴロゴロと転がって技アリとなってしまうので、2回投げてやっと一本をもらったことも有ります。ですから大きな相手だからと、そう臆することもなかったのです。ところが国際化によって起こった変化では、そうも言うておられない影響が出てきました。それは組み手の問題です。互いに向き合った後両手をしっかり組まないで反則が取られるようにルールが変化してきたのです。がちり組み合ってしまうと身体の大きさが俄然影響してきます。大きい人間が断然有利になります。実は嘉納さんが作った講道館柔道は、がちり握り合うことを下策としているのです。嘉納さんが後年柔道稽古の乱れについて指摘した一文を見るとその意味がわかります。

『いつ相手が蹴ってきても、突いてきても、身体をかわすことも出来、身体が自由にかつ軽快・敏捷に働くということではなければならぬ。講道館では、乱捕りをする際、襟をつかみ袖を捕らえて稽古をするが、これは初心者を導くに必要なので、これを最後まで用うべき形というのではない。仮に袖を捕り襟を握っても、きわめて軽く握り、これに力を入れてはいかぬ。しからざれば、急速に身体をかわすことが出来ない。以上の注意に着眼して稽古をするならば、立っている場合に、今日往々にして見るがごとき、むやみに力を入れて、ねじくり合うということがなくなって、ボクシングをやるものの姿勢などに類した一種の姿勢が、乱取りの姿勢になりうるのである』

ここで乱取りというのは自由に技を掛け合う攻防の練習のことです。

国際柔道はまさしくこの点で講道館柔道の方

法と逆のほうに歩き出したのです。身体の大きな腕力の強い相手にがちり取らしてしまえば、小さいものはどうしても不利になります。「柔良く剛を制する」にはよく動き相手の腕力をいなしながらがちり制されることを防ぎ、動きによって相手を崩してそのチャンスに飛び込んで技をかけることが肝要なわけです。体格の同等な者なら力のこじり合いと、最初から制限された範囲内の動きでまあそれなりの試合になりますが、力技中心の柔道に移行していきます。この他、これは国際柔道が防御の技を理解しないことからきているのですが、組み合いの際後ろに下がると判定で不利になる傾向も出てきて、小さい者にとって、間合いを計るための動きが出来にくくなりました。こうした傾向に本家本元の講道館はその度に異を唱えたようですが、連盟の主導権を握るアンチ本家の勢力に押され、昔のように日本の意見が尊重されなくなりました。そして、講道館も国際試合が多くなるにつれ変化を受け入れざるを得ない状況になってきて、今では「講道館柔道試合規定」の方が「国際柔道連盟審判規定」に限りなく歩み寄る改定を繰り返すのが現状です。私も 30 歳の頃まで地方の試合に引っ張り出されたりしておりましたが、重量別でない試合において、こういう審判をされ大きな身体の手との勝負に以前と違った苦勞をした経験があります。のしかかって押してくる相手に間合いを取りながら後退し、押さば引けの崩しに入ろうとすると審判に注意され、もう一度すれば反則にするというようなことを言われました。



おかしな注意と思いましたが、再度注意されそうになったところで崩して払い越しで投げ、何とか溜飲は下げましたが、やりづらい柔道になってきたと思ったものです。

判定方法も大きく変わりました。私の現役時代は試合の勝ち負けのポイントは“一本”と“技有り”“だけでした。一本も技有りもなく試合時間を終了した場合は、主審副審の協議で試合の流れ全体を見て優勢のほうに判定をあげました。個々の試合に優劣をつけなくても良い場合は引き分けもありました。戦前の試合などは全日本選手権決勝でも「引き分け勝負預かり」というのが何回かあります。国際柔道になってこれが細かいポイント制に変わってきました。ご存知のように技有りの下には、有効、効果、のポイントが出来ました。指導、注意、警告、反則負けといった技以外のポイントも出来ました。一見合理的に見えますが、実際には試合の質を大きく変えることとなり、その結果柔道そのものが如何にして一本取るかというものから、何とか膝をつかせてでもポイントを稼ごうといったものに変化することとなりました。

ここまでお話ししてきましたので、日本の柔道選手のそして日本の柔道のジレンマと苦悩について、皆さんお気づきのことと思います。またシドニーオリンピックで勝つはずの日本選手達が敗れた試合について、どうして負けたのかご理解いただける部分があるかと思います。篠原選手がフランスのドイエ選手に敗れた試合は、結果的には誤審ということになったのですが、一度決まってしまった判定は選手が試合場を降りた時点でもう覆すことが出来ないというのがルールにある以上、篠原選手の負けです。後日の日本の抗議に対し国際柔道連盟は「ドイエが掛けた内股は既にドイエの体勢が崩れて効力を継続していないし、篠原選手の内股返しも同様体勢が崩れて効力を維持していない。従って両者にポイントなし。そ

の点ドイルに有効を与えた審判は誤審であった」というような公式回答を出して決着をつけました。篠原にもドイエにもポイントが付かないというのです。冷静なものの目から見ると多分に言い逃れに思われますが、「誤審がなければその後両者が取った効果点でタイとなり判定というところだが、しかし勝負は誤審によってドイルの勝ちと決まってしまったのだから、規定により覆すことは出来ない」ということになります。両者を立てた政治的解決の積りでしょうか。

国際柔道では如何にも力でコジ上げたような決め技でなくては、審判がそれを技と認めないことが多いのです。勢い良く転んでも勢いあまって自分で転んだと見てしまうからです。力技中心のヨーロッパ柔道では、柔道にそんなすばやい技があるということが理解できず、経験する機会も少ないわけですから。従ってポイントが並んで審判の判定により勝負が決められるときの旗判定でも、どちらが優勢かの見方も日本側の価値判断とヨーロッパ側の価値判断が違ってくることがあるんじゃないでしょうか。植橋教子選手が銀メダルに終わった決勝戦や、銅メダルを取った日下部基栄選手が優勝者のフェルナンデスと戦った試合などは、日本人の私の目から見れば勝っていても良い試合です。日本、日本とメダルをみんな持っていかれないように、審判に相手方ひいきの感情があったんじゃないかとの勘ぐりは置いておくとして、柔道競技そのものの質が違って来たことに、基本的な問題が有ると考えます。

そういえば余談になりますが、審判規定によって競技が変わってくるということについて、あるTV番組で元関取の竜虎が大相撲についてコメントしていました。最近、立会いで両手を完全に着くよう要求することに対し「確かに形式美としては美しいが、これを余り完璧に要求すると、小さいものが大きいものに対し大変不利になってしまう。もう今後栃錦のような名人は出てこなくなるのではないかな。そして味の少ない相撲になり、

見る人にも相撲は面白くないものになってしまうと思う」と。

こう考えてみますと、こうした環境の中で日本選手は良くがんばったと言えます。前々からオリンピック優勝を宣言してそれを見事に勝ち取った田村亮子選手はほんとうに素晴らしい選手です。この10数年間で一回しか負けたことがないので（前回のオリンピック決勝で敗れたこと）。そういえば昨日の福岡国際柔道でも11連勝しましたね。同じく金メダルを取った野村忠宏選手、滝本誠選手、井上康生選手、それに先ほど上げた植崎教子選手、日下部基栄選手、この人たちの柔道はこの国際柔道の嵐の中で見事に講道館柔道を活かして見せたと思います。TV放送の解説で上村春樹さんが言っていました。『柔道は日本のお家芸なんだから勝って欲しいと国民に期待されるけど、本当は選手は大変なんです。だけど、その期待に応えねばと努力することが日本選手を高いレベルへと押し上げる力でもあるので、やはりお家芸という気持ちは捨ててはいけません』良いコメントだと思いました。日本の柔道がどういう道をたどっていくのかわかりませんが、講道館柔道の本質というか、本来の良さは何とか残して行って欲しいと思っています。

時間も少なくなつて参りましたので、余計なことではありますがゴルフをやるようになって柔道を考え直すようになったことを、ちょっと話させていただきます。まだ私のゴルフの腕は、冒頭に申し上げたように柔道で言えばせいぜい2段というところですので、余り心得たようなことを言える立場ではございませんが、ゴルフで悩む度にいつも感じることで話させていただきます。それはゴルフをやるようになって「スポーツ」というものがこんなにも微妙なものだったかを改めて知ったということです。自分の身体がこんなにもコントロールしにくいものであるのかを

思い知らされました。昨日アウト・インとも30台で回って、良しと勇んでまた行くと今日はどうしても再現できず45を叩く始末。昨日今日どころか、たった今まで良いショットを出せていたのに、前の組がコース上でトラブって、ちょっといらいら待っていたらおかしくなってしまう。練習場で、あるヒントを掴んで良いショットが出るようになり、よし！ひとつ開眼したぞと喜んでいたので、一晩寝たら元の本阿弥。こんな連続です。まだ初心者頃は、経験不足だから仕方ないのかと思うことにしていましたが、始めて5年・10年過ぎてもことは同じ、となりますとそうも言っておられません。最近ではいくら調子が良くなって、どうせすぐ変わるだろうと自分を信用しなくなりしました。

というわけで、スポーツをする自分の状態はこんなにも微妙に変化しているものなのか、と思うにいたった次第です。ゴルフを始めるまでに柔道は30年以上やっていたわけですが、その間、日々の調子の変化がこんなにも激しいことに気付きもしませんでした。ボールに向って立つ位置がほんのわずか遠いだけでこんなにショットが狂うとか、ラウンドしているうちに次第に前かがみになってしまっていたりとか、変化の原因は無数にあります。柔道でもこんなことが沢山あったはずなのです。思い返してみると確かに有りました。掛からなかった技が急に掛かるようになったり、昨日の乱取りでポンポン投げた相手を、今日はどうしたこと倒せない。投げられる筈のない相手に大切な試合で投げられたことなど、など。勝ったから自分のほうが強いんだ、負けたから相手が強かったんだだけではなく、僅かのことによって投げる事が出来たり出来なかったりすることを、もっと突き詰めて研究し稽古をすれば良かったなあ。と後悔しています。ゴルフがそんな効用の有ることを知らなかったのも、後の祭です。もっとも、ゴルフの事を知っていたとしても貧乏学生時代に、ゴルフなど出来なかったでしょう

から、いたしかたなしですか。で、実は今年の4月大学の柔道部に合宿コーチを頼まれて行ってきたのですが、そのことを一所懸命教えてきました。別に、ゴルフをやれと教えたわけでは有りませんが。

時間も参りましたので終わりにしたいと思いますが、この度講演を仰せつかって、余り好い加減なことを申し上げては失礼と考え、柔道の記録や資料、それに嘉納治五郎さんに関する資料などを調べてみました。そして治五郎さんの生い立ちや、その中で育まれていく人生観、そして先ほど簡単ですが申し上げたように、国のため人のために役立つことをと、一生をまっとうしたことを見るにつけ、改めて明治の頃は人の生き方のスケールが違っていたことを感じております。それに關わる一部分を読ませていただきます。

『私は元来数学が好きで、また比較的数学が出来たので、その方から言うと、天文学とか数学を多く使う学問がやって見たいと思った。天体のことについて知るのが面白くて、十七、八の時に既にエイリーだの、ロッキヤーだの、デニソンだのの書物も読んだ。しかし、また一方から考えると人事上のことで尽くした方が時勢に適切な働きが出来ようとも思った。大学に入るまでは正確な考えは無かったが、大体そんな考えから大学の文学部に入った。またその頃から心身の鍛練ということについて必要を感じ始めた。これは他にも原因があろうが、主に父親が時々昔の心を練った人の話などをして聞かせ、世に処するについての心得などを話してくれた為だと思う。自分で苦しいことも進んでやってみようと言う考えが何時となく出来てきた。精神上的の忍耐もしてみたいし、種々の心を練る工夫もしてみた。好んで石の出道を裸足で歩いてみた。そうして身なりなどは一向に構わなかった。小遣錢なども少ししか使わなかった。大学の時、こう言うことを考えた。学問に活きた学問と死んだ学問がある。活きた学問は実際に用を為すが、死んだ学問は用を為さぬ。

またむやみに書物を読んでたくさん事を知っていても、その知っている事柄次第で役に立ちもし立ちもせぬ。また書物はそれほど読まなくとも、道理をよく弁え、必要の事柄をよく知っていれば、それで用を為す。それが活きた学問である。どれだけ古今の政治上の事実をよく知っていても錯雑な事柄の中に、いろいろな事の原因だの結果を推究する力がなく、他人の為人を知り、他人を扱う方法を会得していなければ政治家として成功しない。書物に書いてある事柄のほかに実際に必要な知識がたくさんある。書物ばかりに心を奪われてそう言う書物以外の知識を得ることを怠るときは、いわゆる書物虫になってしまう。こう言う考えから朋友とも書物以外の知識を磨くつもりで交際もし、論じ合いもした。

そう言うことを考えていくうちに人間と言う者は修行の仕方次第で随分偉くもなれるものだ、人を偉く作ればどんな事業も起こる。人を作ることは実に大切なことだと言う考えが起こってきて、ついに自分を教育に従事しようと言う決心が出来たのである』

『自分は若い時大学を出たら総理大臣に成ろうか、それとも億万長者に成ろうかと考えた事がある。しかし総理大臣に成ったとてたかが知れてるじゃないか。千万長者に成ったとてこれまたつまらない。男一匹掛け替えのないこの生涯をささげて、悔いなきものは教育をおいて他に考えられないという結論に達し教育を志した』

現代のように成熟した資本主義の真っ只中では、企業競争や経済性の論理が人の生き方まで縛ってしまったのでしょう、政治家までが自己の利害を行動の第一基準にしてしまっているように思えます。人のため、社会のたを本気で考え実行する人は居るのだろうかと考えると淋しくなります。そんな意味も含め、私も大変勉強させていただきました。大変つたない話になってしまったと思うのですが、最後までご静聴下さり、感謝いたしております。どうも有難うございました。

講演会講師「上倉 明生 氏」とともに

北爪 進

この度、上倉明生氏には12月のMweシニア会講演会において“柔ちゃんを生んだ日本の柔道”と題してご講演頂き、引き続きの忘年会においても講演内容の質疑応答の時間になって氏には最後までご同席頂きご教授ご懇談頂きました。講演内容には会員の皆さんより深く関心を持たれご要望が多くその講演内容を当月号に掲載頂くことになりました。

氏とは私が大学に入った時からのお付き合いで、学寮の横の柔道場にて、ある日練習台となり投げ飛ばされ、立ち上がれば投げられ、と立っている隙が無いほどであり最後には立ち上がらなかったことで私は“柔道はやめよう”と考えたものです。ある時この話をしたのだが本人投げ飛ばしたことなど全然記憶に無いというのです。とにかく、皆さんもご記憶があると思いますが、当時猪熊というとても強くて柔道家がいましたが、上倉氏は彼と互角に戦ったこと、先輩を立て締めで倒すことなど話題は沢山あります。

大学の工学部では、当時未だ市場には出ていなかった半導体について研究され、卒業後NECに入社したが故ありトリオに移り、その後ケンウッドとなって世界各国に市場を展開するのに活躍されました。その間新しい会社の経営に必要と経済学部にも再入学され勉学と仕事に活躍されたのです、更に“株式会社昭和ハイテック”にて専務取締役の要職を勤め上げた優秀な人材であります。その間も柔道では後輩の指導を行い、大学柔道部の新旧部員230名程で組織されている八畳会の組織の運営のため活躍され、現在はその会長の要職を務めています。

私にとっては同級生とは言え“人生の師”と仰いでいる人物なのです。と言うのも学生時代、就職後、定年後の人生をどのように歩むか常に彼の行動を見て参考にしているのです。柔道では就いていけなかったが、人生一般の処世方法については彼の考え方をこっそり頂き人生設計に取り込もうとしているのです。仕事上、人生一般で苦境に立った時上倉氏ならどう対処するかと考えるのです。

NECの管理職教育などで私が唱えていた”人生3 Quarter説”などもその影響を受けています。

又現在富士宮G.C.の近くに小屋を建てているのも規模は遥かに小さいが彼の定年後の人生の歩み方の影響であります。

ゴルフはシングルの腕前であり、そのために体力強化とゴルフの練習を計画的に実践しているのには感服します。ああそうです、八畳会には堀田健康賞がありますが氏はその第1回の受賞者でもあるのです。名前から内容は想像できるとおもいます。“現在は大学の電気・機械同期のゴルフの会で“エバーグリーン8(エイト)会”と言う会でお会いしその考え方、行動力を勉強しています。

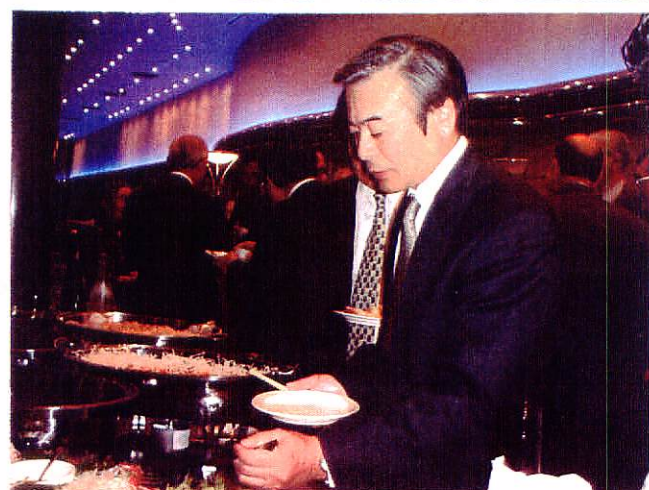
我々の”The Challenge Ginza G.C.“の最強者とのD.M.が実現することを密かに願っているのです。

(平成13年2月)



第7回 Mwe シニア会講演会・懇親会 「利き酒会」開催

2000年12月11日、講演会の後、パシフィコ横浜「VAGUE」にて、利き酒会・忘年会を行い、ご講演いただいた上倉明生氏にもご参加いただいて、23名の参加者がありました。栗井郁雄先生のご推奨の銘酒（4品）と有志から持込みいただいた巨人軍優勝記念の「人気酒」に悦に入りながら、懇親の輪がひろがりました。



Mwe シニア会囲碁同好会設立総会報告

平野 裕

去る1月27日土曜日 午後1時より新宿西口の碁会所「天元」にて囲碁同好会の設立総会が行われました。朝から首都圏大雪の襲来に見舞われ、出席予定者が何人か出て来られなかったのはやむをえない状況でした。しかしながら当会場に着くと、雪をものともしないこの碁会所の常連の方がもうあちこちで熱戦を始めております。我々もまずは設立総会ということで、会則の承認と役員として会長に北爪進氏 幹事に平井克巳氏、平野を選出いたしました。会則は下記に記します。碁の普及にも力を入れ、ぜひこれから覚える人がたくさん出てきてほしいものです。うまい・へた、強い・弱いはあるにしてもこんなに面白い遊びを人生の中で楽しまないのはいかにももったいない。ぜひ、多くの方が、気軽に囲碁同好会例会に顔を出して頂きたいと思えます。総会のあと、まずは小手調べといった按配で対局に移りました。

北爪（黒番）対 平野 戦：序盤からじっくりした進行、中盤 黒 右辺中央よりの数目をあっさり放棄、十分 地で行けると踏んだか。その後右下で 白 緩着、一進一退が続く。終盤のヨセに入り、中央での折衝で 白 が割り込んだところを 黒 ねもとから切ったが 黒 弱点あって、白 生還、同時に 黒 3子 が持ち込みになる。ここで、黒 投了となった。

平井（黒番）対 平野 戦：白 上辺を固めなお 黒 の大石をねらいつつ、という目論見であったが白 右辺でおさまるため、黒 1子を取り込む間に 黒 右下スミから下辺に膨大な 地が形成された。白 しからばと 左下スミの 黒 を取りに行ったが、逆に左辺の 白地に追いやった格好になる。最後、コウ味もあったようだが、黒 召し捕られ、白中押し勝ちとなった。

平井（黒番）対 北爪 戦：序盤から 白、地で先行。一方、黒 下辺の谷を深くし、一等地に仕上げようとしたところ、白 そこに 深く 荒らしに入る。黒 上から包み込み、激しく対抗、結局 白 10子ほど放棄、大きな損害と思われたが、序盤地のリードと左下スミで少し得をした分 まだまだ これからの碁と思われた。中盤、白 が 黒 3子を切るぞと出た時に 黒 ノゾキを利かそうとしたが、白 かまわず ケイマの形を分断。それでも、まだ細かそうであったが、上辺 二線のコスミに白がまわり、終局。数えて白10目勝ちとなった。

実はこの日、大雪のせいもあり、出席者は3名でした。本当はその後の懇親会もと思っていたのですが、足元悪く5時頃退散しました。次回は是非たくさんの方に出席して頂きたいと思えます。

Mwe シニア会囲碁同好会会則

1. 名称

本会の名称をMwe シニア会囲碁同好会とする。

2. 本会の設立趣意

囲碁を通し、Mwe シニア会会員の親睦をはかる場を提供するとともに、会員への囲碁普及を推進する。

3. 会員資格

会員資格はMwe シニア会会員とする。

但し会長の承認を得て 非会員のゲストを招待することができるものとする。

4. 役員

本同好会に会長（1名）、及び幹事（2名）を置く。

5. 会費

会費は 特に設けない。基本的に例会の費用は出席者負担とする。

6. 例会

例会は適宜 行うものとする。（年2回から4回）

6. 段級位、対局、ルール

段級位は 自己申告による

対局のハンディは 段級位の差の置き石とする。（ただし9子までとする）

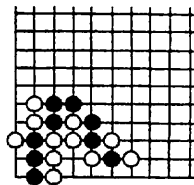
昇級昇段は連続する10局で7勝3敗以上の場合とする。降級降段はないものとする。

対局ルールは日本棋院が定めるものに準ずる。

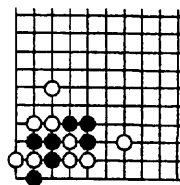
制定日 平成13年1月27日

以上

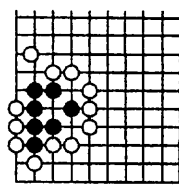
問題1



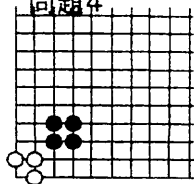
問題2



問題3



問題4



問題1から3 全問正解の方は9級の実力があります。（黒先活き）
（関西棋院 新聞紙上認定より）

問題4は 黒先 白死（左右同形中央に手あり）
（基ワールドより転載）

準天頂衛星システムの研究動向と その応用

Mweシニア会会員 (株)ジェピコ取締役 北爪 進

AIAA衛星通信フォーラムでは日本等の中緯度地域において高仰角の衛星通信システムを提供できることから最近注目を集めている準天頂衛星通信システムについて検討委員会を設置し、その実現に向けて研究状況を調査検討してきた、その一端をここに紹介する。

準天頂衛星システムは、中高緯度地域においても高仰角で衛星通信できることから、その特長を活かすことが可能な移動体衛星通信等への適用を中心に近年関心が高まりつつある。これを受け、本項では、このような状況における準天頂衛星システムの研究状況とその応用について紹介しよう。

1. 準天頂衛星システムの特徴

準天頂衛星システムは、静止衛星と同じ高度36,000kmで、軌道傾斜角45°の円軌道に衛

星が投入され、図1に示す「8の字」型の地上軌跡の軌道を周回するシステムである。同図に示す軌道上を航行するゆえに、以下に示す特長を有している。

- ・高仰角での通信が可能であり、シャドウイングが少ない。
- ・地上局からの通信方向が天頂方向であり方向検出が容易である。
- ・降雨減衰が少なく高い周波数帯(Ka帯、ミリ波帯周波数)の利用に有利で大容量の通信が可能である。
- ・通信方向が対静止衛星方向と異なるため、干渉分離が容易で周波数再利用が可能である。
- ・極圏が見通し内となり、極地域の観測・通信に利用できる。
- ・静止衛星と組み合わせて測位に利用できる。

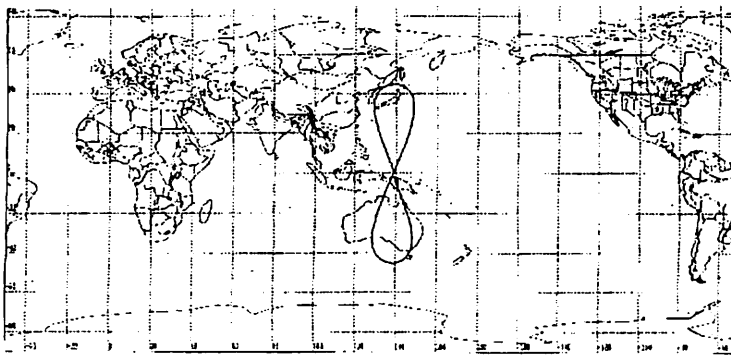


図1 「8の字」軌道衛星の地上軌跡

2. 軌道面と軌道上衛星配置について

昇交点経度が120°ずつ離れた3面の8の字軌道に衛星を3機投入し、その軌道面内の衛星位置位相を各々120°ずつ離すことにより、中緯度地域でもサービス中の1つの衛星が高仰角視野から外れていくと、次の衛星が新たに高仰角視野に入ってくるという可視特性を有する衛星群システムを構築することが可能となる。準天頂衛星システムは上記特性を有する軌道群に3機の衛星を投入し、中緯度地域でも常時高仰角の上空に衛星を配置することを可能とすることを特長とする衛星コンステレーションシステムである。

図2にこの特長を有する準天頂衛星システムの軌道の幾何的な関係を例示する。

3. 準天頂衛星の応用

日本・赤道域・オーストラリアの3地域で常に高仰角の上空に衛星が存在する

- ・日本：仰角70°以上
- ・赤道域：仰角60°以上
- ・オーストラリア：仰角70°以上

以上、特長および軌道と軌道上衛星構成を例示したように、準天頂衛星は高緯度地域でも高仰角で衛星通信サービスが可能であることから、移動体衛星通信における建物や樹木その他の障害物による通信障害に対してその障害を取り除く方法を提供するシステムである。同時に衛星測位システムにも適したシステムでもあることが理解される。

さらに、図3に示すごとく3機よりなる衛星通信システムでは同一衛星が同一地域でサービスする時間は8時間であり、他の16時間はサービスを停止することとなる、この停止している時間帯を他の地域でサービスさせることによって例えば図3の例では日本、赤道地域、オーストラリア地域の3地域を同時にサービス領域とすることが可能である。

MWT Quest

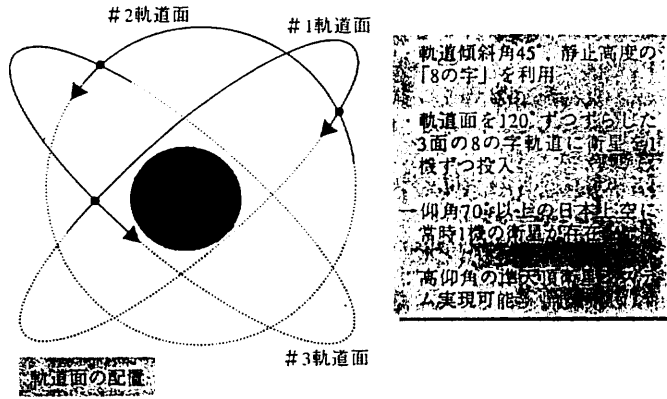


図2

準天頂衛星システムの軌道の幾何的な関係の説明図

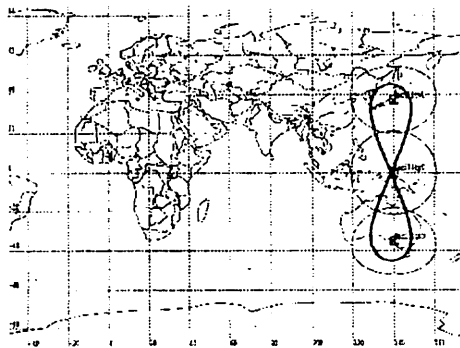


図3

同一システムによる3地域同時サービスの概念

日本上空にて移動体、測位衛星システムを構築運用し目的を果たした後の16時間を、自ら衛星通信システムを持ってない赤道地域の国に無償提供することが可能であり両国にとって友好的に同一システムの運用が可能となる。

4. 今後の展望

準天頂衛星システムの実用化としては衛星移動体通信として放送システムや測位システムの可能性が主体的に検討されてきたが、21世紀の少子、高齢化社会のニーズとして被介護者の位置情報や保護者との情報通信として衛星測位技術と個人向け移動体通信を組み合わせた移動体応用システムとして「介護システム用移動体通信システム」の検討が有意義なものとなろう。

また8の字軌跡は赤道を中心として南北対象のサービス領域が得られることより、日本上空での8時間サービスの残りの16時間を有効に使う方法として赤道直下の国々に対して無償使用权を認めることで自国では保有できない衛星通信システムの実現に役立つことで途上国の発展に貢献することが可能である。この国の自発的要望があればその国に適した衛星通信システムの建設のためにODA資金の利用も視野に入れた検討を行うのも有意義なことであろう。

衛星通信とマイクロ波技術は密接な関係にあり、このような形での衛星通信システムとマイクロ波技術の融合が21世紀の情報社会に貢献することを期待している。

(出典：平成12年4月、準天頂衛星システム検討委員会報告書)

●Mweシニア会では平成12年12月11日(月)午後3時30分より特別講演を開催致しますのでご参加下さい。

日時：平成12年12月11日(月)
午後3:30~4:30

会場：パシフィコ横浜 会議センター3階
311会議室

講演：「柔ちゃんを生んだ日本柔道」
講師：上倉明生氏

※入場無料
多数ご参加下さい。

MIL規格電子部品の生産減少に対処する 米国航空宇宙産業の最近の動向

(財)電子部品信頼性センター
デバイス規格研究委員会 委員長 山下榮吉

従来は厳しいMIL規格による電子部品が存在したお陰で、厳しい環境に耐えられる電子機器も生産可能であった。したがって自動車、航空機、ロケットのような最先端技術による極限的設計製造も進めることができた。しかし数年前からMIL規格電子部品は次第に製造されなくなってきた。これは経済性が一因ともいわれる。いずれにしても民生用電子部品をどうしても使用せざるを得ない状況となっている。しかし民生部品の品質と信頼性が充分かどうか心配となる。

自動車部品に関してはQS-9000規格により生産システムの保証と部品の認証が行われることになった。宇宙航空部品に関しては米国およびヨーロッパの航空宇宙関係産業が1998年に新たにAvionics Working Group (AWG)を設立し、このMIL規格の代用品問題に対処することになった。AWGにはAerospatiale, Airbus, Bell Technologies, Boeing, British Aerospace, Daimler Chrysler, GEC Marconi, Honeywell, Litton, Lockheed Martin, Northrop Grumman, Raytheon Aircraft, Smiths Industries, TRW/Lucas, U.K. Ministry of Defence, University of Maryland, U.S. Dept. of Defence等の60以上の有力企業、大学、官庁からの代表が200名以上参加しているが、日本の組織は参加していない。事務局はIECおよびIECQの本部にある。

AWGは民生用部品の中から航空宇宙産業用部品を適切に見出す作業を部品マネジメントと名付け、共通の電子部品マネジメントの方法を定めようとしている。今までの段階では、MIL規格部品採用から民生用部品採用に転じようとする航空宇宙関係製造業者は部品の信頼性と応用の適格性を確認する必要があった。また、部品製造業者の指定よりも広い温度範囲での使用法を決めるにも共通のプロセスが必要と考えられた。このようなプロセスがすべての部品に適用可能となれば最も効果的である。AWGは正にこの共通のプロセスを決めるために設立されたのである。2000年中には、AWG組織がIECの中の新技術委員会 (Technical Committee for Avionics Process Management)に移行する予定である。

現在、AWGは次の3種の文書を作成中であるが、いずれも2000年中に公表されることになっている。

- ・第一文書 部品マネジメント計画書ガイド
- ・第二文書 製造業者指定温度範囲外での部品使用ガイド
- ・第三文書 電子機器の信頼性評価ガイド

これらの文書は航空宇宙関係製造業者のような電子部品ユーザが利用することを期

待しているが、電子部品製造業者のための文書ではない。

第一文書は、まず航空宇宙ユーザが電子部品を使用する時に遂行すべき9項目の目標を列挙し、次に電子部品マネジメント計画書 (Electronic Component Management Plan, ECMP)について述べている。この計画書は目標を遂行するプロセスを文書化するために電子部品ユーザが作成しなければならない。計画書がユーザの顧客または認められた第三者 (例えばIECQ) によって承認された後は、計画書の要求を満足するすべての部品は使用に適していると見なされる。

第二文書は航空宇宙ユーザ部品製造業者が指定した温度範囲の外側で電子部品を使用するために守るべきプロセスを述べている。(このプロセスを「熱的定格上げ (Thermal Uprating)」と呼んでいる) この文書は元来は処方箋なので、航空宇宙製造業者は第二文書の要求を満足するようなプロセスを設定して文書化しなければならない。航空宇宙製造業者の定格上げプロセスが承認された後は、この航空宇宙製造業者の全製品にこの定格上げプロセスを利用してよい。

第三文書は信頼性評価計画書の内容である。これは航空宇宙製造業者が作成するのであり、製品の信頼性を評価するプロセスの文書である。この文書は従来の手引書の方法とは基本的に異なるが、代りの方法となることが期待されている。

AWGはIECおよびIECQ制度を活用することを前提にこれらの文書を作成している。したがってここでIECおよびIECQの概要を説明しておこう。

国際的な電気技術の協議の場であるIEC (International Electrotechnical Commission) はすでに電子部品認証制度 (IEC Quality Assessment System for Electronic Components, 略称 IECQ) を1982年から運用している。これは電子部品の貿易円滑化を目的とした世

MWT Quest

界規模の電子部品品質認証制度であり、加盟国のいずれかの国が規則に従って認証した部品に対して、他の国では再検査することなく受け入れることを決めている。

この制度の特徴は、ISO 9000に基づく品質システム認証だけでなく、IEC発行の品質仕様書に基づく検査と試験を実施して、試験に合格した場合に品質認証を行う点である。ただし、この認証の範囲は電子部品、関連材料、および関連プロセスに限定され、さらに使用できる仕様書がIECの発行する部品の品質仕様書に限定されている。

他方で、自動車産業グループのQS 9000と同様に、航空宇宙産業グループも独自の品質システム規格AS 9000を制定し、この規格に基づいて第三者認証を行っている。ただし部品の調達に関してはQS 9000の場合と異なっており、部品製造業者にAS 9000に基づく第三者認証を要求していない。AWGは調達する部品の品質と信頼性を確保するために、IECQと共同の規格を制定しIECQ制度を利用しようとしている。

AWGが作成した前述のガイドの運用に関してはいまだ明確にされていないが、航空宇宙用電子機器メーカーがガイドを基にして電子部品の品質と信頼性を保証するシステムを構築して審査を受け、IECQ登録を行うようになると考えられる。

IECQの加盟国は現在18ヶ国(中国、デンマーク、フランス、ドイツ、インド、イタリア、日

本、韓国、オランダ、ノルウェー、シンガポール、ロシア、スイス、タイランド、ウクライナ、イギリス、アメリカ、ユーゴスラビア)である。また監督検査機関(Supervising Inspectorate, SI)を持ち認定活動を行っている国は12ヶ国(中国、デンマーク、フランス、ドイツ、インド、イタリア、日本、韓国、ロシア、スイス、イギリス、アメリカ)である。ちなみに日本のSIは(財)日本電子部品信頼性センターである。

最近のIECQの委員会では、前述の第一文書に関して認証手法を検討するWorking Groupを設立し、最初にパイロット審査を実施することを決定している。第一回のパイロット審査の対象としてハネウエル社が選ばれている。審査に合格すればプロセスマネジメントの認定書が発行されるはずである。

ここで第一文書の内容についてやや詳しく紹介しておこう。これは航空宇宙用電子機器に使用する部品を認証するための、矛盾なく、管理され、繰り返し可能なプロセスを製造会社が持つことを示す文書である。この文書化されたプロセスには過去にMIL規格を使用して完成された機能も含まれる。この計画書により部品使用者は、航空宇宙応用のために特に製造され認証された電子部品ソース以外のソースも利用できるようになる。このガイドに沿って作成された航空宇宙応用の電子部品マネジメント計画書は、これに従って設計製造される機器の中の全電子部品が管理されたプロセスで使用され

ば意図した用途に適することを、顧客と規制機関に保証するものである。

ガイドの本文では、電子部品マネジメント計画書の目的、適用可能性、構成、用語と定義、実行、活動の中心部署、参照文書について述べている。

さらに付属書Aとして計画書作成ガイドラインを詳しく示している。計画書の目的および要求項目には機能性、電磁気環境両立性、信頼性評価、ストレス解析およびダイレーティング、熱的評価、構造評価、製造可能性、試験およびテストビリティ、保全性を含めている。その他の項目には部品認定、部品品質保証、機器製造プロセスとの部品両立性、部品データ、形態管理、製造業者仕様外での部品使用、廃版管理等がある。

付属書Bは計画書に含まれる事項をさらに詳細に具体的に示している。これはテンプレートとして文書作成に利用することも想定している点に特徴がある。最後にはマネージメントの手続きに関して5枚のフローチャートと3枚の図表を示している。

以上に述べたように製造業者の部品管理能力という新しい形の審査も含めて航空宇宙関係MIL規格部品の生産減少に対処する方法を決定しつつあるのが米国の最近の動向である。しかも2000年中にかなりの進展が見られると予想される。

第8回行事の案内と今後の活動計画

★ 講演会と燻製パーティーの開催案内

下記のようにMweシニア会の第8回目の行事を行いますので、会員の皆様におかれましては、お誘い合わせ多数ご参加下さるよう案内致します。

日時：2001年3月31日(土) 11:30~16:00

場所：新井亭

(1) 講演会

演題「50歳も過ぎてから、アメリカで学んだこと」

講師：百々仁次郎 氏

(2) 燻製パーティー (ワインなどの持ち込み歓迎)

(3) 参加費 4000円 (同伴者 3000円)

詳細は追ってお知らせします (申込み先：井下)

★ 囲碁同好会へ参加のお誘い！！

会員のより一層の親睦を深めるため、このたび囲碁同好会を設立いたしました。会員のなかには、有段

会員名簿 (五十音順・敬称略)

赤田 邦雄 <k-akada@midoriya.co.jp>
新井 陽一 <arai-aie@mb.asmnet.ne.jp>
栗井 郁雄 <awai@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp>
井下 佳弘 <ishita.yoshihiro@aa.anritsu.co.jp>
石田 修己 <ishida@isl.melco.co.jp>
石原 浩行 <sakaimst@mub.biglobe.ne.jp>
井田 雅夫 <ida@murata.co.jp>
伊東 正展 <itoh-aie@mb.asmnet.ne.jp>
上野 清 <ueno-kiy_a@star.hq.anritsu.co.jp>
大友元春 <ohmoto@cc.teu.ac.jp>
奥野 清則 <okuno@lab.jrc.co.jp>
小渕知己 <tobuchi@spc.yh.nec.ne.jp>
影山 隆雄 <t-kageyama@bx.jp.nec.com>
春日 義男 <kasuga@ahsra.or.jp>
片木孝至 <katagi@neptune.kanazawa-it.ac.jp>
北爪 進 <kitazume@mx.mesh.ne.jp>
久崎 力 <kyuzaki@mtg.biglobe.ne.jp>
許 瑞邦 <kyo@kyolab.ee.kanagawa-u.ac.jp>
紅林秀都司 <kurebayashi@wave.spc.co.jp>
加藤 吉彦 <ykato@kikusui.co.jp>
小林 禎夫 <yoshio@reso.ees.saitama-u.ac.jp>
小牧 省三 <komaki@comm.eng.osaka-u.ac.jp>
小山 悦雄 <koyama@tecdia.co.jp>
酒井 正人 <sakaimst@mub.biglobe.ne.jp>
佐藤 軍吉 <satoh@j-phone-tokyo.com>
柴富昭洋 <sibatomi@tarucha.jst.go.jp>

者もおられ、プロとの対局の機会もあります。初心者でも歓迎いたしますので、加入をお待ちしています。(問い合わせ：北爪、平井、平野)

Mweシニア会 会員の加入状況

Mweシニア会に新しく入会された会員は、次の方々です。2000年10月20日現在、個人会員46名、賛助会員2名(個人1、法人1)となりました。年度目標会員数は、50名(個人)としており、会員数の拡大にもご協力願います。

久崎 力

アンテン(株)

紅林秀都司

島田理化工業(株)

関 周 <sseki@stc.sekitech.co.jp>
高橋 弘 <sanken@pop21.odn.ne.jp>
遠山嘉一 <toyama@utyu.cs.fujitsu.co.jp>
百々 仁次郎 <j-dodo@nifty.com>
内藤 喜之 <titech.pres@sv1.jim.titech.ac.jp>
名村 久機 <h.namura@fmt.ts.fujitsu.co.jp>
西川 敏夫 <nishikwa@pearl.ocn.ne.jp>
橋本 勉 <t-hashii@cc.teu.ac.jp>
平井 克巳 <katsumi@lsil.com>
平地 康剛 <hirati@to.fqd.fujitsu.co.jp>
平野 裕 <hirano@to.fqd.fujitsu.co.jp>
堀 重和 <shigekazu.hori@toshiba.co.jp>
牧本 三夫 <makimoto@mrit.mei.co.jp>
松本 巖 <imatsumoto@stc.sekitech.co.jp>
三島克彦 <katsuhiko.mishima@glb.toshiba.co.jp>
水品 静夫 <smizu@mail.yaramaika.ne.jp>
山下 榮吉 <yamashita@mth.biglobe.ne.jp>
山下 與慶 <itoh-aie@mb.asmnet.ne.jp>
米山 務 <yoneyama@titan.tohtech.ac.jp>
脇野喜久男 <wakino@murata.co.jp>

賛助会員

関 周 (個人) <sseki@stc.sekitech.co.jp>

アイ電子(株)(法人) itoh-aie@mb.asmnet.ne.jp